

## 歴史の証言者 ルイス・フロイス

東光 博英

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイス（1532-1597）はわが国が初めて西欧と出会った16世紀に渡来した重要人物の一人である。在日30数年間に布教活動で西日本を巡り、織田信長や豊臣秀吉ら天下人から庶民まで各層の日本人と交わっただけでなく、その豊富な経験と知識をもとに様々な日本情報を綴った数多の布教報告書をヨーロッパに発信した。また、『日本史』と『日欧文化比較』と題する著書もあり、現代では当時の日本を知るための記録としてよく活用されている。いわば歴史の語り部である。フロイスは1563年7月、西九州の横瀬浦（現、長崎県西海市）に上陸した。今年は来日450周年に当たる。特に彼の名を現代の日本に広く知らしめているのは『日本史』であろう。この書は彼がイエズス会総長の命により1583年から十数年間、心血を注いで著したもので、1549年のザビエル渡来から1593年までの布教史と日本の出来事が詳細に記されている。フロイスはインドで来日する前のザビエルと日本人ヤジロウに会うなど日本布教を発端から知っており、また文筆の才能があり日本の諸事情に通じていたから正に適任者であった。約300章からなり、写本にしておよそ2500頁に達する大著である。これはひとえにフロイスの非凡な観察力と詳述を好む性格によるものであり、今日の歴史研究に大いに役立つとしても、執筆当時はそれが仇となり簡明な記録を望む上司からヨーロッパに送ることを許されなかった。フロイスの落胆はいかばかりか。1593年、すでに老いていた彼はローマのイエズス会総長に嘆願書をしたためている。「今や私の余命も甚だ心許ない限りである。（中略）猥下のご返信に接するまでこの命があるかどうか知る由もない」（11月12日付、拙訳）と悲壮感が漂う。日本からリスボンまで書簡の送付に2年半を要する時代であった。結局、『日本史』の原稿は送られず、彼の死後にキリスト教への迫害を避けてマカオに移され聖パウロ学院教会で長い眠りについた。1835年、教会が全焼し原

稿は失われたと見られるが、幸いなことに18世紀に作られた写本が数奇な運命を経て20世紀にポルトガル国内で発見された。1976～84年にリスボンで復刻本が出版されたが、日本語訳は直接写本からなされ、1977～80年に詳細な訳註を付した12巻本が刊行された。この訳註本を世に送り出したのは、本学の教授であった故・松田毅一博士と川崎桃太名誉教授である。日欧交渉史とフロイスの研究者であった松田博士とキリスト教やポルトガル語、ラテン語に精通した川崎名誉教授のお二人であったからこそ成しえた偉業である。私自身、両先生の薫陶を受け、長年にわたりイエズス会文書の刊本や写本を扱ってきたので、かの訳業が困難を極めどれほど労苦を強いられるものであったかは容易に察せられる。従属文が幾重にも連なる、ぞっとするほどの長文にローマ字の日本の地人名や日本語の語句が説明も無くしばしば入り交じり、時にラテン語文が挿入されている。訳文は400字詰原稿用紙で6000枚に上ったという。これが刊行された時、日本での反響は大きく東京都内の電車の中吊り広告に出たのは学術書としては異例であった。同書には布教のみならず政情や戦争、事件、宗教、風俗習慣、天変地異など当時の日本の状況が豊富に記されているので多くの人の関心を惹くのは当然である。また、フロイスの文章は詳細かつ確かな描写が特徴であり、豊臣秀吉など著名人の言葉が一人称で記されていて甚だ臨場感に富む。例えば秀吉の「皆が見る通り、予は醜い顔をしており五体も貧弱だが、予の日本における成功を忘れるでないぞ」（第4巻）の言葉は当時の日本人には書けないことであろう。また、日本の史料にない事柄を記しているため、時々学者の間に論争を招いており、フロイスに対する評価も分かれている。確かに教会の利害に関わることでは事実の歪曲や脚色が見られ、教会史の記録としては欠点を持つが、日本の諸事については概ね客観的であり、邦文史料の不足を補うという点で価値があると言える。それにしてもフロイスは、欧州の同志らに届けたいとひたすら願っていた著書が4世紀後に日の目を見、日本でこれほど読まれ利用されることを想像したであろうか。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)